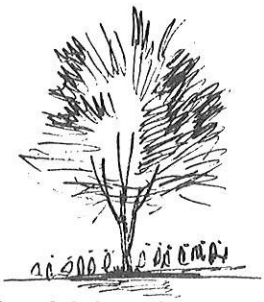
ひかりのこ

光の子



No.126　2007.10.1

●今年の聖句　人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。（マタイによる福音書16：26）

「夏の思い出」　　挿絵・中島英子

「盆」

ちちははの恋しき路をひたに刈る
ひとすぢの水を沿はせて盆の路
木に草に風の親しき盆の入
まるく盛る仏の飯や秋の風
霊棚に夜すがら弾む風の音
さはやかに信士信女とならびをり
汲み上げし閼伽あきかぜを溢れしむ

黛　執（「春野」主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

育ちゆく子どもたち

菅原哲男

社会福祉法人光の子どもの家は創立後二十三回目の秋を迎えた。

子どものための子どもの施設建設とその運営を理念とし、何もかもが手探りの状態で、先達に教えを乞いその足跡を窺い、そして子どもたちの願いを聴きながら夢中で走り出し、激しい施設開設反対運動の渦中からその名残を引きずっていた頃やってきた子どもたちも、もう子どもの親になり、それぞれ社会的に自立を果たしつつある者たちがいる。

8月末、大阪に所用がありその一日前の夕方出かけて夜大阪に着いて前泊した。

出る前に、ここを出て大阪で仕事をしている二〇代半ばの女子と三〇代の男子に夕食を約していて、安い飲み屋で待ち合わせた。

二人とも想像を超える家庭や家族の状況の中で愛着を求めながら果たすことが出来ず、満たされない空虚な心や体でやってきた。女子は、きょうだいで入所した妹である。幼児期での入所だったが、風が吹いたら飛ばされそうな華奢な体でベタベタと甘えていた。学童から高校の時期には幼い頃の心の穴を埋めるかのように出来る限りの反撥を表現した。

高校三年生の正月を過ぎた頃、後一〇日登校したら卒業だと言うときに、恋仲の男子と家出をしてそのまま帰らなかった子どもであった。

子どものための子どもの施設としてあるべきだった光の子どもの家から家出されたことに、私たちは、利用すべき子どもに拒否されたと、かなり傷つき落ち込んだ。どうしようもなく反撥する子どもで手に負えなかったとしたら、その子を出すのではなく、私たちの力量がその子どもを受け止めるのに足りなかったのだから、私たちが職を辞するべきだと考えていたからである。

それから八年。転々とした彼女は大阪に落ち着いたが、担当だった岩崎保育士に何くれとなく相談や連絡などをくれるようになっていたのである。昨年は田中施設長が全養大阪大会に参加した折りに彼女と一夕食時を共にしてきてもいた。

男子の先輩を待ちながら、その女子は、「光の子どもの家ってさぁ、他の施設と違うよね。ホントの家族だとつくづく思うよ」と生ビールを飲みながら眼をうるませた。

男子は一人で来るかと思ったら家族でやってきた。零歳から四歳までの三人の子どもと夫人を連れて。

店に入った頃は客がそこそこいたがしばらくするとそのフロアーは私たちだけになっていた。

三人の幼子たちはまるで運動会のように走り回り、笑い、叫び回った。光の子どもの家では長男として育った彼は運転するということで、彼女の知らない夫の幼く年若い頃の何とも手こずらせてくれたことどもを肴に、夫人が一緒に付き合ってくれた。

そろそろ幼子たちの眠くなる頃になり、彼は妻に、そして後輩の女子に、「オレはさぁ、どこの誰よりも光の子どもの家の大人に世話を掛け心配させたと思うよ。だけどさぁ、それがオレの宝物なんだよ。オレは光の子どもの家で育ったことを隠したことはないよ。それよりも誇りに思っているよ。」と思い詰めたような顔で言ったのである。

この二名は、養護メモやこの欄で何回も登場した子どもでもあったほど手を焼き、その上まっすぐに育ったとは言えない出発ち前後だった。

子育ては、二〇年後の姿を想像力を駆使して洞察し、今何を伝えどう関わるのかを考えながらゆったりと丁寧に関わりの水準を高めていくことに私たちのはたらきは尽きることを学び、確認した夜であった。種を蒔きすぐに実がなる植物はない。

二名とも、私たちの関わりの失敗例としてしか総括できない子どもたちであったのだから。

「キリストに照らされる幸い」

浜田山キリスト教会　牧師　奥田　健一

この4月、私は埼玉県の栗橋町にある教会から東京・杉並の教会に転任した。それまでの数年間、光の子どもの家で月に1回、聖書のお話をし、その後子供たちと一緒に夕食をいただく幸いなときが与えられた。

ただ、この働きを始めた頃、光の子どもの家に向かうのに苦痛を感じていた。それは、彼らにどのように接し、また聖書を語ったらよいかわからなかったからである。私よりも遥かに厳しい環境の中を通ってきている彼らの心の中に、聖書のメッセージが届くのか、私にはその自信がなかった。

そんな中、菅原前施設長が何気なく私に次のようなことばをかけてくださった。「先生のように外から来て、光の子どもの家を見てくださる方がいるのは本当に助かります」。

このとき、私の心の中に光があてられたような気がした。私のような者でも何かお役に立つことがあるかもしれないと思った。

考えてみると、私たちは、自分のこと、自分の家族、自分の学校、自分の国のことが分かっているようで意外とわからない存在ではないか。最善と思っての行動が実は的外れとなることも起こりうる。現在、社会で外部取締役や第三者機関の必要が叫ばれているのも、内部にいると見えないことがあるからである。

私たちもいつも聖書から、キリストから教えられる必要がある。キリストとそのことばに照らされて、初めて自分たちの本当の姿が明らかになる。キリストは、あらゆる境遇の中にある人の心と行いを照らことができるのである。

このことを教えられたとき、私は、私のメッセージではなく、彼らの心を照らすキリストのメッセージを伝えようと決めた。お話をするときの緊張は最後までなくならなかったが、人の心を照らすキリストへの信頼は増し加わった。

不安と傷の中にあるこの国のすべての人の心を、キリストが照らしてくださることを心から祈っている。

「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすればキリストが、あなたを照らされる」聖書

夏、佐渡、感謝

鈴木洋一

この夏、光の子どもの家でのお盆宿泊行事の中に、新潟県の佐渡ヶ島での七泊八日という何とも贅沢な旅行があった。これは今年度初めて行かせて頂いたもので、本当に降って湧いたような話、棚からお萩（もとい牡丹餅）のような話なのである。

遡ること二十五年以上前、前施設長、現スーパーバイザーの菅原哲男が勤めていた神奈川にある児童養護施設に、明治学院大学の学生がボランティアとして数名来られていた。しかし実際にはボランティアとは名ばかりで、菅原宅に押寄せては酒、煙草を呑みながら当て所の無い議論を繰り返し、その合間で気が向けば子どもとキャッチボールでもやってやるか…というものだった（本人様談）。その中に、今回の佐渡ヶ島旅行のお話を提供してくださった池田源一郎氏がおられた。

「佐渡ヶ島に行かせてくれるって話があるんだが、お前その池田さんと連絡取って調整してくれ。こんな話は滅多にない有難いものだから、後に繋げられるように失礼の無いようにな。でもこの池田ってのが変わり者でな…」

こんな話を菅原から受けた私は、早速電話で連絡を取り始めたのだが、先の菅原の言葉の意味は、良い意味で即刻理解した。氏は佐渡生まれ東京育ちで現在も東京にお住まいだが、格別に佐渡を大切に想ってこられた。また幾つかのNPO活動に積極的に参加されており、特に日本にいる南米の方々への支援に力を入れておられ、とにかく親切心溢れる方であった。

話を戻し、この夏の佐渡では本当に多くの方々のお世話になり、その篤い人情に心から感謝することしきりであった。特に七泊八日という長い間、総勢十七名を泊めて下さった池田多嘉子様には厚く感謝申し上げます。子どもたちは帰ってきてからも佐渡の土産話をこれでもかと言わんばかりに連日続ける傍ら、職員にも写真を見ながらいかに佐渡が魅力と人情溢れる土地だったかを報告した。

この光の子どもの家がこうして多くのご支援とご協力により、二十二年前から現在に至るまでの年月を歩んでこられた事を思うと、子どもたちが笑顔で明るくいられるのは皆様のおかげであると一点の曇りもなく確信している。数々のご支援に心から感謝申し上げます。

エッセイ

夏の終り

彫刻家　中島　睦雄

夏休みが終って風が涼しくなるようになると、何となく物悲しさに襲われるものである。

こんな物悲しさを感じるのは、どうしてなんだろう、と思う。

「それはねぇ。」と、Y君が言い出した。「それはねえ、何十年も前の、子供の頃にね、夏休みの宿題が終らなくて、不安にかられながら結局は時間切れで登校して、叱られた記憶がよみがえってくるからなんだよ。俺なんか宿題は完璧にやったからそんな事は一度もなかったけどね。」と言って笑った。そして、「と言いたいけど、本当は一番その不安におびえていたのが俺なんだよ。だから、夏の終りになると、今でも何となく落着かなくなるんだ。子供の頃の記憶って恐ろしいもんだなあ。」と言って、そこにいた二、三人と一緒に大笑いとなってしまった。

Y君の分析は正しいかも知れない。私自身、Y君の理論にぴったりとあてはまる状況のくり返しであったようである。

ところで、私が小学生の頃、夏休みの或る期間に、天神様の前の庭に、みんなが集まって勉強するという習慣だか決まりだがあって、一応勉強らしいものを毎年やっていた。

子供たちはそれぞれ、むしろとすわり机を天神様に運んで、上級生の命令で机に向かわせられた。上級生は勝手に時間割を決めて、「国語の時間ダド！」「音楽の時間ダド！」と言って勉強させた。しかし、これは自主的な学習ではないから、実が入らない。上級生が下級生の勉強内容を指導するわけでもない。

時々、学校から先生がやって来て「しっかりやっているか。」と声をかけてくださった。

しかし、ここでの勉強は、勉強というより《遊び》だったのではなかったろうか。ただ、《不健全な遊びでない遊び》程度のものだったのかも知れない。したがって、ここで夏休みの宿題を能率的に仕上げるという事は所詮むりな事であった。

この勉強会で傑作だった事の一つに、或る《音楽の時間》での事があった。

「音楽の時間ダド！」という例の上級生の言葉に、下級生から順に一人ずつ歌をうたうというのがあった。その時、次々にうたわれる歌のすべてが、流行歌であった。たまたまそれを聞いていた近所の大人の人がやって来た。「もっとうまく歌え。」とでも言われるのかと思ったら、「子供が流行歌ばっかりうたっていてはダメだ。教科書で習った歌をうたいなさい。」と言われた。伴奏のオルガンがあるわけでもなし、みんな自分勝手に調子ッパズレの歌を、しかも流行歌ばかりうたっていたので叱られるのもむりはなかった。

もっと傑作な事もあった。

戦後間もない頃だったので、タバコの配給も少なかったのであろう。大人のタバコ好きは、ふきの葉を細かく刻んで天日に干し、それを古い辞書などの薄い紙で巻いて吸ったものである。そんな事は子供でもできるものだから、子供もふきの葉で作った急ごしらえのタバコを何本かポケットにしのばせていた。

「休み時間ダド！」の合図に、隠れてそのタバコを吸っている時、運悪く先生が巡回して来て、みつかってしまって、こっぴどく叱られた事もあった。

こんな形の勉強をやっていたのでは、とうてい宿題が終ろう筈がない。

それでも、二学期は始まってしまう。みんな何とか宿題を提出しなければならない。

中には、大分苦労のあとが見えるものも出てくる。当時自由研究というのがあって、自分で自由な研究物を提出する事になっていた。《押し葉》を作ってきた子がいる。しかし、身近な植物を集めて、紙にはさんだのは良いのだが、これが、どう見ても前の晩にアイロンで無理矢理押さえつけたらしいのである。或る程度の時間をかけて乾燥させ、標本として何らかの説明が欲しいところだが、そんな時間がなかったらしく、植物の名前すらない。ただ夜中にひたすら、ジュージューとアイロンを押す涙ぐましい姿が想像されるというシロモノであった。

ご本人は泣きべそをかきながら、そしてお母さんは「だから早いうちに宿題をやっちゃいなさいって言ったでしょ。毎年毎年同じ事を言わせるんだから！」と怒り顔。

――いや、これは私の体験ではないんですよ。ほんと、ほんと、私の事じゃないんです。私なんか宿題は毎年早めに、しかも完璧に？ほんと、ほんと――

それにしても、夏の終りは、なぜか物悲しいものである。

学者もどきのつぶやき ⑩①

妻の病

山形大学
前学長　仙道　富士郎

「光の子」の原稿を書くのに、こんなに逡巡し、書き始めるまで時間を要したことはない。せっかちな性格で、原稿の依頼が来ると、ほとんどすぐ書き始めていた。今回は締め切りが間近でないことも手伝ったが、今こうしてパソコンに向かうまでもう何日も過ぎてしまった。

これまで「光の子」には、そのときどきの出来事や想いを綴ってきた。とすればこの度の妻の病を原稿に書かないわけにはいかないのかなとまず思った。しかし片方の乳房を失った妻のことを思うとそのことを皆のまえに曝すむごさを感じないわけではなかった。長いことためらったあとで、今度のことを「光の子」に書いて良いかと尋ねた。「良いよ、わたしは隠してないから」とすんなりと彼女は言っていたが、「無神経な人だ」と思ったかもしれない。

事の始まりは、他の病気の検診で胸部のCTを撮ったときに、検査の目的とした肺には病変は認められなかったが、左乳房に陰影があることが明らかになった事である。病変部に太い針を刺して悪性なものかどうか調べた。妻は「悪いものではないと思う」と言い、私もそう願ったが、結果としては癌であった。「他の病気の検診で見つかるなどラッキーだよ」と私は言い、事実そう思ったのだが、癌という言葉の響きは二人に重くのしかかった。

手術の日時が決定されるまでの日々は、そばで見ている私でもかなりまいったのだから、本人の辛さは想像に難くない。眠っていると思って覗いたら、顔に涙がにじんでいたこともあった。

手術は無事終わり、転移もないということで、胸をなで下ろした。それからの仙道君の働きは目を見張るものであった。手術の終わった夜から毎日、子どもたちにメールで長々と病状を報告したのだが、子どもたちからはさっぱり反応がなく、「冷たい奴らだ」と呆れていたのだが、あとで医師をしている長男から聞かされた話では、医学専門用語がたくさん含まれていて、とても分かりにくかったとのこと、少し張り切りすぎたということらしい。三～四時間しか眠れず、疲労の末に、喉の風邪を引いて、すごい声になってしまい、病人や子どもたちからは、「お父さんのほうが心配だ」と言われる始末。

退院してからは、リンパ節切除から来る腕の浮腫を心配しながらの毎日であったが、少しずつ元気になっていくようだった。しかし、治療を完全なものにするために行われた癌の化学療法は、またまた彼女を深みに陥れた。化学療法そのものは一日で終わったのだが、二週間後の血液検査では、人体の防御に大事な役割をしている白血球が極端に減少していることが分かった。

医師免許証を持った偽医者としても、事態がそれほど簡単ではないことは分かり、それまでさぼり加減になっていた家事にまた精を出さなければならないと思った。なんと言っても、彼女にとってとても辛いのは、髪の毛が抜け始めたことである。彼女は剛毛で、豊かな白髪を誇っていたのだから、気の毒というほかない。「円（孫の一人）に化学療法で髪が抜けると言ったら、『富士郎おじいちゃんも化学療法したの？』と言われそうだね」などと妻は笑っているが、一人の女として心穏やかでないことは見て取れる。そういえば、左乳房摘出の手術の前日に病院から電話をしてきて「今日は少しブルーなの」というから、「死ぬのが怖いか」と尋ねたら、「女心の分からない人ね」と言われてしまったこともあった。

妻の癌の原因の一つは、酒を飲み、五人の子どもの世話を皆押しつけ、そのほかにもなにやかやと彼女にストレスを与え続けた私にもあるように思う。反省するために三ヶ月ほど酒を断ったが、彼女の回復とともに、またぞろ時々痛飲して帰宅し、先日はとうとう妻に怒られてしまった。

完治に向けてまた、酒を慎まなければなるまい。

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節　仙道家

いつもお支えいただきましてありがとうございます。四十日間の夏休みの報告をさせていただきます。

その一。

家族と共に過ごせない沢田兄妹、美咲、小野姉妹と冬子の六名は、菅原先生のご友人、府川様のご招待により湯河原での海遊びを楽しみました。プールでは潜ったりひっくり返ったり、元気いっぱいの冬子がざっぶーん波の海を目の前にしたとたん「うわぁ！」と感動の声をあげたものの、恐れをなして海には入ろうとしませんでした。海は楽しいのにね。

その二。

早々に宿題を終わらせた沢田兄妹。彼らは家族とのやりとりが全くありません。そんな彼らが寂しい思いをしないように鈴木（洋）指導員が勤務が休みの日を遣い、兄妹を自宅に招いてくれる関わりを続けてくれています。この夏も奥様からハガキが届いたり、生後二ヶ月のお子さんに会わせて下さったりあたたかい心遣いに、兄妹も嬉しそうでした。

その三。

龍治は高校生活初めての夏休み、海にも山にも行かず、家庭帰省もせず、部活、部活の毎日。最高気温四十度の日も部活をやった。プール入りたーい、海行きたーい、遊びに行きたーい。でも部活漬けの毎日も青春っていう感じです。

池田　祐子

光の中で　佐藤家

この夏、猛暑の中、子どもたちは大きな怪我もなく過ごすことができました。様々な宿泊行事が続き、子どもたちにとっても大人にとっても、楽しい思い出がたくさん出来たことと思います。

宿題を一人で完遂できた子、お喋りや運動が上手になった子、毎日怒られてばかりいた子と様々ですが、この夏休みの出来事が一つでも子どもたちの心の栄養になっていれば…と思います。

夏休み、体も心も大きく成長します。新学期の準備中、“体育着が小さいから買って”“このズボン小さいんだもん”等の声を聞き、嬉しくなりました。また、三歳の彬をみていると、“去年の夏はまだ石けんをかじっていたのに…”と成長を強く感じます。また同時に自分は成長できているのだろうか…と反省もします。

皆様にとって、どのような夏になったのでしょうか…。

田口　貴子

原田家日記

朝晩は幾分過ごしやすくなりましたが皆様はいかがお過ごしでしょうか。

この夏も子ども達と共に秋田へ出掛けさせて頂きました。4年ぶりに行くことになった浩伸はあの時のような幼さを少しばかり残してはいるものの、もう背丈は私と変わらない程成長した中学二年生です。兄と行く最後の外泊となったあの時の事を思い出すこともあったようです。浩伸が成長している間、近くの町並みも随分変貌しました。国道のバイパスが開通し大型量販店が軒を連ね、人や車の流れが大きく変わり便利にはなりましたが、当然そこに懐かしさを感じる事はありません。

今回の旅行で、時代と共に町並みは変わるけど、山並みは何百年も前からほとんど変わっていないという当たり前のことに今更ながら気づきました。田沢湖からの帰り道、覆い被さるような杉の木々が夕闇にさらなる影を落とす山裾の県道を走りながら「この山の風景と同じものを何百年も前の人たちも見ていたんだ」と思い何となく感動してしまいました。子ども達の成長、我々の成長（老化）、町の発展とそれぞれ変わっていく中で、変わらない自然の風景や思い出を大切にしていきたいです。

小西　剛史

季節のおとずれ　竹花家

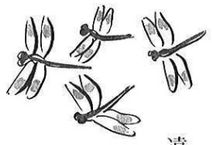
行事が盛り沢山で目まぐるしかった夏休み、竹花家の子どもたちにとって、一週間の佐渡旅行、またそれぞれの夏期行事での体験や多くの出会いは、ひとり一人の心にたくさんのすてきな思い出を残し、心身の成長をもたらしてくれました。（それと共に膨大な量の宿題が残っていた子もいましたが…苦笑）

同時にこの夏は、高三の有紀と中三の美季にとっては進路を選択する大切な時期でもありました。

美季は目標が見えて頑張ろうとしているところ、有紀は進路と自分の家族と向き合い、悩み考える日々を過ごしています。自分がやりたいと思った介護の道。ホームヘルパーの講座を受け、その実習で現場を知り思いを深める中で、就職か進学か、自分はどうしたいのか、家族のこと、卒園後…など、考える程に焦りや不安が増していき、たくさんの気持ちの揺れを表現しながら、模索し続けています。

どの選択をしても、その先は自分次第なんだということ、だから有紀が自信を持って「自分がこうしたいからこう選択したんだ」と言えることが一番大切だと思うよ、ということは伝え続けてきた日々。

今、逃げずに必死に戦っている彼女が、自分自身の思いと力で将来を切り開いていけるように、私も逃げずに向き合い続けていけたらと思います。



河のほとりで　倉澤家

遠藤　陽子

猛暑続きの夏休みが終わり、子どもたちは全員元気に新学期を迎えることができました。成黎にとってこの夏休みは、小学生としての初めての夏休みでした。

夏休みに入ると、キャンプや佐渡が島での一週間に及ぶ夏期行事など、たくさんの方々のご協力で様々な経験をすることができました。独特な感性の持ち主である彼は、どこでもかわいがっていただき、良い思い出をたくさん作ることができました。

そんな彼が、夏休み後半のある日…「ぼく、ぼくのうちが嫌だったから旅に出たんだ。それでその時歩いていたら倉ちゃんちがあったから、ここがいいと思って倉澤家に来たってわけ。わかった？」と言ってきたのです。「そうなんだ。よかった。成黎が来てくれて良かったよ。」と返事をするのが精一杯でした。

もちろんこれは彼の空想であって現実ではありませんが、何故急にこんなことを言い出したのか、私にはわかりませんでした。

二歳で入所してから現在に至るまで「家族」と呼べる者と顔さえ合わせた事のない彼です。成長と共に自分の出生や家族についての疑問は広がり、本当のことを知る日が来ます。彼にとって真実を知るということは、大きく深い傷を受けることを意味します。

残念ながらその傷を防ぐことはできませんが、正しい治療とリハビリを手伝うことのできる担当者でいたい、そう願っています。

倉澤　智子

事務所の窓辺から

去年度から事務を始めました、田中要一です。まだまだ覚えなければならない仕事が山積みの上、やらなければいけない書類も山積みの状態で、今にも雪崩が起きそうですがなんとか持ち堪えています。

光の子どもの家の指導員として二年間を過ごし、現場を知る時間を頂いた上で事務職となり、それまで担っていた指導員という立場を活かして、縁の下の力持ちになろう…とは言うものの、やはり直接子どもと触れ合う時間が少なくなってしまうのは、子ども好きの自分にとって耐え難いものです。ついつい仕事を後回しにして子どもたちと遊んでは、施設開設から事務を担当してきた現施設長に叱られ…というのが現実です。

この夏休みも子どもたちと出掛ける機会はほとんどなく、かろうじて一泊二日の湯河原行きに参加できた程度です。

しかし嘆いてばかりもいられません。自分が仕事を覚えないと現施設長は施設長職と事務職掛け持ちという状態になってしまいます。つまり、光の子どもの家は自分の肩に掛かっていると言っても過言ではない（!?）そんなことを言われながらお尻を叩かれつつ、自分は「そろそろ本気だすか～!?」なんて言いながら明るくやっていこうかなと思っています。

田中　要一

養護メモ 117

家族に関わる その19

菅原 哲男

この数年の光の子どもの家への入所する子どもたちの入所理由は虐待が全てである。

虐待を通告された家族、とりわけ親たちは一様に虐待という行為を強く否定する。

一の場合もそうであった。

とりわけ実母は強くそれを否定したのであった。

入所の受け入れがその後の子どもや家族との関わりの傾斜角を決定する。否定している親たちの心的な状況について、受け入れる私たちがどの程度の想像力をはたらかせて傾聴し共感するのかがカギになるのである。

一の実母は実父と離婚をして間もなく現在の義父と再婚し複数の子をなしていた。実父、義父、実母はお互いによく知り合っていた関係であったことからかなり微妙な心理的な葛藤があったと考えるのである。

特に義父については、再婚することを決意した時から〈よい父親〉になろうと固く決意していたに違いない。このことは、祖父母とのやりとりのなかでも確認できたものである。

実母の再婚に頑なまでに反対した祖父母は、「子どもたちとの関係が必ずダメになる。その時子どもたちはどうなるのか」と問い質し面罵もしたのだという。その時義父は、「彼（実父）よりももっとよい親になり、立派にこの子たちを育ててみせる」と言い返したという。一や姉の美子などが親たちとトラブルになると、そう近くもない祖父母のところに逃げていき、実母たちの仕打ちを子どもの身勝手な偏りの色彩を付け足して口を極めて言い立てたのだった。いつでもそうなのだが、人は最初に入った情報を信じやすいのである。それが事実でないとして、その事実を受け入れるには最初の情報を消去しなければならないので非常に困難なのである。祖父母は、不憫な孫の言い分に自分たちの不満やマイナスの思いを重ねて同調した。

実母にしてみれば祖父母は自分にとって〈家族〉なのである。家族とは感情をコントロールしないで表現できる関係にある。だからマイナスに偏ると無限大に悪感情が生成されて表現される。父母にかくれて金品をくれる祖父母は一たちきょうだいにとってかなり都合のよい存在でもあった。きょうだいと祖父母、きょうだいと親たち、祖父母と親たちという三角関係のなかで、都合のよい方へと子どもはながれるのが常なのである。

これは施設内での担当との関係が確立するまでの子どもと大人の関係のなかでも日常的にあることでもある。そのようなわけで、関係した役所を訪ねて一の入所を確認し激怒した祖父母と実母義父の関係は最悪の状態でもあった。

話を入所の時点に戻そう。

家族が傷つき病の状態になった経緯について、どのようにその当事者の状況を想像しその家族に関わるのかが重要なのである。いわゆる共感的傾聴といわれるカール・ロジャースが提唱し、臨床心理士等にとって常識となっている態度が肝要なのである。そうはいってもなかなかそうはならないことの方が多いのだが、ここはしっかり押さえておかなければならない。話したい事柄を、自由に話す事のできる安心した環境を整え、批判に曝される心配を取り除き、話す内容を受け入れてもらえる信頼できる人間関係を築いていくための重要な入り口なのだから。そのようにして、心理的な問題や直面している困難、苦悩について率直に話し合う事による成長促進や問題解決の効果を得られる様になることをめざすのである。

具体的に子どもが施設に入り自分たちの領域から分離されていく、まさにその場面で、感情の高ぶりを押さえかねている家族に対していくのは、何よりもそこにいたる過程について想像力を働かせることが必要不可欠なのである。もし自分や家族などの親しい者がそのような場面や事情にあったらどうだろうか、と自分に置き換えていくことで共感の領域に入り込むことが可能になる。家族と情緒的な一致にいたる過程である。

児童養護施設光の子どもの家では、子どもの家族を最も大切な客人として迎えることを原則にしている。それは、人の世話になる事へのためらいや引け目などを全身に満たしてくる家族と同じ地平に立つために必須のことなのである。

はじめは自分の不満ややりきれなさを必死で言い立てるのに全身全力を尽くしている家族が、その位置まで同化するよう努め、やがてここでの面会のルールや決まり事などについて説明が可能になるようこころを尽くして対応するのである。

一の家族もこのようにして入所手続きを終えたのである。

現場から

続・光の子らしく ㉗

岩崎 まり子

年々早くなるような刈り入れも始まり、ここ光の子どもの家の窓の額縁で見る生きた風景画は、秋を通り過ぎ冬になっていくかのようです。

皆様、いかがお過ごしでしょうか。

ある春の日の早朝、キッチンで食事の支度をしていると一本の電話が静けさをつき破りました。時間も時間だったので咄嗟に訃報だと思ってしまい、あわてて受話器をとりました。すると、

「生まれました！女の子です！」

予期していたこととの余りの落差にうまく反応できず、妙な間の後、

「おめでとう。慎二？」

「そうです。今、生まれました！」

彼の喜びが音叉のように伝わってきて、

「そうかぁ、今かぁ…。本当におめでとう！奥さんは？」

「母子共に良好です。また落ち着いたら連絡します。ありがとうございました。」

そうです。あの暴れん坊将軍のような彼がお父さんになったのです。まるでテレビ電話のように向こう側にいる彼の喜びの表情が伝わってきて、こちらも目頭が熱くなりました。

生命の誕生には、本当に言葉が必要にならないほどの感動があります。とても厳かで神々しく…。ちょっと一くくりにするのはどうかと思うのですが、私は子どもの頃、ウミガメの産卵をテレビで観たことがあります。そのときも理屈でなく泣きじゃくってしまいました。生命はそうやって、感謝と感動の中で生まれてくるべきものなのだろうと思います。確かに生まれる時や場所、親は選べません。戦時下に生まれる生命もあるでしょう。それでもやはり、そうであって欲しいと願わずにはいられません。

私たちの身近に今、未婚の母になろうという女性がいます。彼女自身幼くて、とても母親になれそうにないと誰もが思ってしまう女性です。今も悩みは尽きませんが、やはり、生まれようとしている生命は厳かで神々しく、感謝と感動をこそ呼び起こす生命であると信じたいです。

しかし一方で、今、目の前にいる小中高校生たちに、彼女と同じ道を歩んで欲しいとはまったく思わないのも正直なところです。

ある晩、丘実が、

「結婚式やって、お薬飲んだら赤ちゃんが生まれるんだと思ってた。結婚しなくても赤ちゃん生まれるの？」

と尋ねてきました。皆から「おめでとう」といわれる結婚や出産の方が皆が幸せになれるということを丁寧に伝え、お母さんになったら赤ちゃんのことを育てていく責任があるのだということも伝えました。その流れの中で、

「施設とかで暮らすのと、お母さんやお父さんと暮らすのと、どっちがいいと思う？」

と私が訪ねると丘実は即答しました。

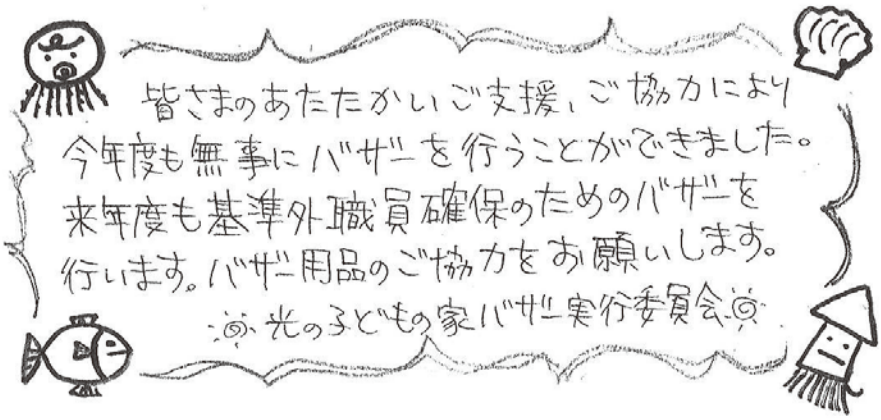
「おばあちゃんとかお母さんと暮らすより施設の方がいい。ここには皆いるし、楽しい。」

――想像していなかった答えに驚きました。

伝えたかった意図とは離れて、自分の初めての子どもの誕生を、あの声の調子からすると恐らくここに一番最初に連絡してくれたのであろう慎二のことが頭に浮かびました。

ここを選択するしかない子どもたちの現実を一方では捉えながら、何でもないようなことを紡いでいくここでの暮らしが、彼らの中でどういう形で結実していくのか。楽しみでもありますが、とても恐ろしい思いがします。

実るほどに頭を垂れる稲穂を前に、謙虚に「子どもの生命を育んでいくこと」に取り組んでいきたいと思います。



日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2007年4月1日▶5月末日

２００７年　４月

幼児３名 小学生１８名 中学生６名 高校生７名 措置外４名 計３８名

５日　幼稚園入園式　１名　保育士が見守る中での入園式 幼稚園の制服を着て少し恥ずかしそう
新高校１年生３名　自らが選択した道を歩むにあたり決意を新たにするため秩父へ

６日　進級進学祝い　入学式よりひと足先に真新しい制服に身を包んだ姿凛々しい中高生　まだ大きすぎるランドセルを背に緊張気味の小学生

９日　小学生３名、中学生２名、高校生３名　それぞれ入学式　新しい学校生活への希望を抱きながら

２１日　大塚東一様のご招待でいちご狩り　いちごを口にたらふく頬張り幸せそうな笑顔　感謝

２３日　新任職員歓迎会　遠藤陽子　高野真夕子　鈴木康孝 赴任　大志を胸に光の子どもの家に来られた新任職員を囲んで歓迎の意を込めた昼食会

２８日　グループホーム引越し開始

〈４月の物品ご寄贈者〉

小沢　松本繁子　高橋一子　山中久枝　他多数の各位様

５月

４日　こども祭り　テーマ「Love and Peace」友人や家族などが集まり工夫を凝らしたゲームや模擬店など 卒園生も加わり五月晴れの楽しく賑やかな一日

９日　後援会　赤十字奉仕団の皆様により除草ご奉仕　感謝

１０日　田村様　散髪ご奉仕　変わらぬご支援に感謝

２３日　大利根中学校との定期連絡会　学校生活や家での生活の課題と役割を確認

２６日　第82回理事会
聖学院大学ワーク　子どもたちと遊んで下さる

２９日　しずくの会の皆様により除草ご奉仕　感謝

〈５月の物品ご寄贈者〉

古川景子　石川順江　宮原康子　市川光一　積真由美　中澤雅宏　杉山和俊　小林幸子　原安男　サイトー
荒井ひろし　染谷　宇津木三郎　菊池　鈴木たきお　藤田　栗橋キリスト教会　宮沢　アンヌアーレ　桜井孝雄　宮沢嘉代子
東埼玉バプテスト教会　佐藤登　市川千代子　坂本わか子　春山のり子　斉藤米店　鳥越宏子　神田美智子　渡辺雅子　芹沢美保　他多数の各位様

☆今年度も折り返し地点を過ぎましたがこのような歩みを続けております。今後ともよろしくお願いします！（くら）

反射光

☆過ぎたはずの夏が名残惜しそうに九月に入ってからも厳しい暑さを残しています☆この夏休みの様子をプリズムにご報告しました☆この夏も皆様のあたたかいご支援によって様々な場所でお盆を過ごすことができました☆子どもたちと共に心から感謝しております☆学者もどきのつぶやきを寄稿して下さっている仙道富士郎山形大学学長が八月をもって任期を終了されました☆氏は光の子どもの家設立当初からご協力下さっており今も変わらずご支援頂いております☆来年にはパラグアイでの海外協力活動に参加されるとのこと☆現在はその準備として様々な講習を受けておられます☆去る九月五日渡部かずき君死去から四年☆渡部かずき君記念礼拝を光の子どもの家で執り行いました☆毎年のように当時のクラスメートの殆どが集まって下さり天国のかずき君も喜んでいることと思います☆二十三回目の実りの秋を迎えます☆二学期を迎えた子どもたちが学校という教育の場で力一杯励んでこれるよう競争とは無縁のかけがえのない存在であることを感じられるような家での生活を築いていきます☆今後とも更なるご理解ご支援をよろしくお願いします。（のぶ）